

静岡新聞 2023 年 12 月 14 日 付

論壇

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

大阪で前回の万博が行われたのは1970年であった。当時の私は高校から大学に進学する時期であった。幸運にも万博を見学する機会があった。後から振り返ってみると、万博は私の人生の中の思い出として刻まれた。

この万博では、米国館に展示された月の石に象徴されるように、人類の未来について考える展示が多かった。1970年というと、日本の高度経済成長の真ただ中であり、多くの日本人にとって成長を続ける日本の未来像を描く機会でもあった。

それから50年以上たった今回の大阪・関西万博のテーマは、「いのち輝く未来社会のデザイン」であり、サブテーマとして、「いのちを救う」「いのちに力を与える」「いのちをつなぐ」の三つを掲げている。こうしたテーマを通じて未来像を描くわけだが、

持続可能性描く万博の運営

50年前とはその内容も大きく異なる。

50年前であれば、より速く、より多くの、経済的なそして科学的な成果を実現するということが前面に出ていた。そうした将来像は高度経済成長期の当時の日本にも合っていた。これに対して、今回の「いのち輝く未来社会」というメッセージの中には、地球環境や人権といった持続可能性に関わる問題が中心となる。

気候変動問題をはじめとする劣化する地球の環境に私たちはどう対応したらよいか。人権や貧困の問題についてどう考えるべきなのか。ここで問われているさまざまな問題は、50年前の万博のテーマとは大きく異なるものである。そしてこれらの新たな問題については、輝く未来の姿を描くこともできない。

万博の運営においてもこのテーマについてきちっと議論すべきだということ、持続可能性有識者委員会が立ち上げられた。私もその会議に参加しているが、万博の運営の中で持続可能な社会のあり方にどう対応するべきかを、専門家が集まって議論している。

万博運営の中での建物の建設や資材の調達、施設域内での

の脱炭素や資源循環など、詳細にわたって検討が行われている。万博の運営そのものが、持続可能性の考え方に沿ったものであることが求められるのだ。万博の来場者の方々はパビリオンの展示を通じて持続可能な社会のあるべき姿を具体的な展示などを通じて考えることが期待されるが、その万博の運営そのものが持続可能性を意識したものになっている必要があるからだ。

50年前の万博が高度成長への期待感を国民の多くに持たせたように、今回の万博では持続可能な「いのち輝く未来社会」のイメージを多くの人に共有してもらうことができればと思う。1800日という長期間開催される万博であるので、持続性のある社会の価値を国民の多くが考える機会となることを期待したい。

50年前の「若者」であった私たちがその後の社会のあり方を考える機会となったように、今回の万博にはこれから世代を担う若者に積極的に参加してほしいものだ。万博のレガシーを次の世代に残すことが重要だ。

まだ5000日近くある万博。静岡ではまだ関心は高くないようだ。会期までにより多くの人が万博に関心を持って、会場に足を運んでくれることを願っている。